カケル

vol. 3

美祢市

kakeru

ゆめはくカフェ通信

August 2021 **3** Mine

楽しみを発掘する

梅原 真
（デザイナー）

×

松田寛之
（秋吉台ゲストハウスTRIP BASE COCONEEL）

山口県央連携都市圏域
山口ゆめ回廊
博覧会
YAMAGUCHI YUME KAIRO EXPO

ゆめはくカフェとは

山口ゆめ回廊博覧会が開催される山口県央連携都市圏域の
７市町をつなぐリレー形式のトークイベントです。
地域ホストはそれぞれのエリアで活躍するキーパーソン、
ゲストは圏域外で活躍するアーティストやクリエイター。
両者が各地域のとっておきの場所を会場に語り合い、
地域の魅力を掘り起こしていきます。
カフェでくつろぐように、楽しいおしゃべりに耳を傾けてください。

そんなイベントの模様を収録した『ゆめはくカフェ通信 kakeru』。
ゲスト×地域ホストの“かける”と
７市町に七色の虹を“かける”イメージから名付けました。
トークとともに、その土地の持ち味を存分にお届けします。

山口ゆめ回廊博覧会　2021年７月～12月

山口県央連携都市圏域（山口市、宇部市、萩市、防府市、美祢市、山陽小野田市、島根県津和野町）で開催する、地域の特徴をいかした周遊型博覧会です。愛称は『ゆめはく』。特別な場所で体験するアートと食のコラボレーションや、普段は見ることができない場所を案内するスペシャルなまち歩きなど、「いま・ここ」でしか体験できないゆめはくに参加しよう！

公式Webサイト　https://yumehaku.jp

日本最大のカルスト大地「秋吉台」

秋吉台ゲストハウスTRIP BASE COCONEEL

地方に必要なのは、
都会の真似じゃない。
その土地にしかないもので
コミュニケーションを。

ゆめはくカフェ　vol.3

「楽しみを発掘する」

2021年6月12日
秋吉台ゲストハウス TRIP BASE COCONEEL（美祢市）

観光資源を掘り起こして地域と来訪者をつなぎ、
地元の人々の寛ぎの場としても人気を得るゲストハウスの経営者。
さまざまな地方でその土地ならではの価値を見つけ出し、
売れるポイントに変えていく仕掛け人。
それぞれの視点が捉える地方の可能性やデザイン的な思考について、
多くの事例や発想が詰まったオンライントークとなりました。
4人の楽しいやり取りをお届けします。

梅原 真
（デザイナー）

×

松田寛之
（秋吉台ゲストハウス TRIP BASE COCONEEL）

ゲスト

梅原 真　Umebara Makoto

高知県生まれ。デザイナー。高知県在住。高知というローカルに拠点を置き「一次産業×デザイン＝風景」という方程式で活動する。かつおを藁で焼く「一本釣り・藁焼きたたき」。柚子しかない村の「ぽん酢しょうゆ・ゆずの村」。荒れ果てた栗の山から「しまんと地栗」。砂浜しかない町の巨大ミュージアム「砂浜美術館」。どこにでもある新聞から「しまんと新聞ばっぐ」。秋田県の「あきたびじょん」。島根県の離島・海士町の「ないものはない」のプロデュースなど。「土地の力を引き出すデザイン」で2016毎日デザイン賞・特別賞。武蔵野美術大学客員教授。
http://umegumi.jp/

地域ホスト

松田寛之　Matsuda Hiroyuki

1981年美祢市生まれ。22歳で上京しインディーズバンドで活動。35歳で初めてサラリーマンとなる。たくさんの人と出会う中で人の世界観を聞くことが楽しく、人と関われる仕事を作りたいと思い、2019年9月に秋吉台ゲストハウスTRIP BASE COCONEELを開業。美祢市の魅力を最大限に伝えるべく、未公開の洞窟を探検できるケイビングツアーや原付バイクで旅をするサービスを展開。
https://www.coconeel.jp/

カルスト台地に鍾乳洞
美祢市は絶景の宝庫！

――BEPPU PROJECTの山出です。今回は、ゲストにデザイナーの梅原 真さんを迎え、地域ホストに『TRIP BASE COCONEEL』代表の松田寛之さん、山口ゆめ回廊博覧会クリエイティブディレクターの服部滋樹さんを加えた4人で、地域の楽しみ方を発掘していきたいと思います。早速ですが松田さん、自己紹介を兼ねて、Uターンに至った経緯と現在の活動内容について教えていただけますか？

松田　美祢市の高校を卒業後、バンド活動をするために22歳で上京しました。12年間の活動後、結婚を機にシステムエンジニアに転身して3年ほど働きました。実は、上京してすぐに人混みが苦手ということに気づいて、早く自然の豊かな美祢市に帰りたいと思っていました。そして2019年に、念願だった美祢市にUターンすることができました。

美祢市には、日本最大のカルスト台地である秋吉台をはじめ、秋芳洞や別府弁天池など、さまざまな観光スポットがあります。にもかかわらず、観光客は年々減る一方。しかも、そのほとんどが日帰り客です。当初は、地元企業に就職しようと考えていたのですが、秋吉台周辺に宿泊施設がほとんどないことを知り、「滞在してもらうことで、美祢の魅力をもっと知ってほしい。地元を活性化したい！」と思い立ちました。そこで、父や友達の協力を得て、かつて祖父母が営んでいた定食屋をDIYで改装して、ゲストハウスにカフェ＆パブを併設した『TRIP BASE COCONEEL』をオープンしました。

――現在の状況について教えていただけますか？

松田　オープンしてもうすぐ丸2年になります。おかげさまで、滑り出しはとても順調だったのですが、昨年はコロナの影響で売り上げが大きく下がってしまいました。現在はだいぶ盛り返してきています。

2020年には、新しく観光用原付のレンタルサービス『乗旅』をスタートさせました。美祢市の自然を肌で感じられる新しい観光スタイルとして、徐々に認知度があがってきています。また、経験豊富なケイビングガイドとタッグを組んで、未公開の洞窟を探検するツアーとゲストハウスでの宿泊とをセットにして販売しています。

一次産業 × デザイン
土地の力を引き出す

――続いて、デザインの力でその土地の風景を守り続けている梅原さんの活動についてお話を伺いたいと思います。

梅原　高知県香美市というところに事務所を構えて、1次産業に関連した仕事に多く携わっています。四万十川の流域は、山に囲まれた狭い農地のため、農作物の生産量は限られています。ですから、付加価値をどのように高めていくのかを、いつも考えています。事例として、四万十栗再生プロジェクトを紹介したいと思います。四万十川流域の旧十和村（現在の四万十町十和）は、かつて日本有数のクリの生産量を誇る地域でした。しかし、中国産の安いクリに押されるようになり、ピーク時には年間800tを超えていた収穫量は18tにまで激減してしまいました。その結果、15年も放置された山はすっかり荒れ果ててしまい、いわば“あきらめられた風景”が残されていました。でも、見方を変えれば、農薬も化学肥料も使われていないオーガニックな土壌が残されていたともいえます。それを逆にチャンスととらえて、『四万十栗』を『しまんと地栗』という呼び方に変え、「安心・安全なオーガニック」という価値を商品パッケージにわかりやすく表現しました。このクリを使った一連の商品は、東京新宿のデパートの催事で、わずか1週間で500万円以上も売りあげました。

――高知の「安心・安全な風景」がきちんと伝わったからこその結果だったのでしょうね。

梅原　渋皮煮のヒットをきっかけに、さまざまな商品が誕生しました。なかでも人気なのが『しまんと地栗モンブラン』です。売れ行きがよすぎて、クリが足りなくなってしまったこともありました。そこで、丹波からクリを借りてきて『おたすけ地栗　丹波』として販売したところ、これまた大ヒットしました。そうしているうちに、withコロナの時代がやってきました。今度は、各家庭で思い思いのモンブランが楽しめるようにと『おうちでモンブラン』をつくりました。さらに今年は、新しい加工場『SHIMANTO ZIGURI FACTORY』が完成し、しまんと地栗

左：新しい観光の形として注目されるレンタル原付サービス『乗旅』。このサービスを利用すると美祢市内の飲食店や雑貨店などで多彩な特典が受けられる／右：『TRIP BASE COCONEEL』では、一般公開されていない洞窟を探検するアクティビティと宿泊とをセットにしたお得なプランを提供している

1

2

3

4

1. 梅原 真さんがプロデュースする『しまんと地栗シリーズ』。商品のパッケージデザインをはじめ全体のコミュニケーションデザインを手掛けている／2. 3. 無農薬・無化学肥料という新たな価値を見いだし、経済活動につなげることで、荒れ果てたクリの山が生き返った／4. 今年5月に完成したSHIMANTO ZIGURI FACTORY。ここでクリを使った菓子の製造をおこない、全国に出荷している

客室は男女混合ルームと女性専用ルームの2タイプ。ヨーロッパのパブをイメージした木の温もりあふれる店内には、オーナーの松田さんがセレクトしたアイテムがセンスよくレイアウトされている

を中心に、四万十川流域で作られている農産物や加工品を全国にお届けしています。このようにピンチをチャンスととらえて、さまざまな取り組みにチャレンジしています。

――インターネットで注文を受けて、山の工場から全国に商品を直接発送する。そうした仕組みまでもデザインされたのですね。

梅原　土地の新しい価値を見いだし、どのようにして経済活動へとつなげていくのかを考えていかなければいけないと思います。そのためには、デザイン的な思考が欠かせません。先ほどの四万十栗再生プロジェクトの場合は、安心・安全を価値に変えようと考えました。このように、1次産業とデザインとを掛け合わせて、土地の風景を残していきたいというのが僕の考えです。

　また、「デザインは笑い」だとも思っています。大阪の学校で学んだことが影響しているからなのか、根底に笑わせないといけないという意識があります。お気づきの方もいらっしゃるかもしれませんが、しまんと地栗と『スタジオジブリ』は響きが似ているでしょう？ ネーミングの段階からすでに笑いを仕込んでいます。

デザイン＝コミュニケーション
ちょっとしたことが楽しさに

――松田さんのお店の写真を見て、梅原さんはどのようなことを感じられましたか？

梅原　店の前に置かれた黄色い原付バイクがとてもシンボリックだと思いました。緑と白がベースの秋吉台にもよくマッチして、これ自体がすでによいデザインになっています。もし、これが赤だったら、秋吉台の景観には合っていない。ほんのちょっとしたことですが、この黄色いバイクが人々のコミュニケーションを楽しくしている。バイクのデザインも丸っこくて、大らかな自然と調和していると思います。

松田　そう言っていただいてとてもうれしいです。実は、山口県の名産である夏みかんの色をイメージしています。このバイクがコミュニケーションのきっかけとなり、訪れた人の記憶に残るといいなと思っています。ゲストハウスの内装は、僕が好きなロンドンパブやアイリッシュパブの雰囲気をイメージしています。板の色が違うのは、実はペンキを買うお金がなかったからです。当初の計画とは違い、2色になってしまいましたが、想像以上にかっこいい空間に仕上がったと満足しています。

梅原　先ほどのSHIMANTO ZIGURI FACTORYも、屋根や外壁にはトタン板、扉に見えるところには山から伐り出した木を使うなど、低コストで仕上げるためにさまざまな工夫を凝らして

『TRIP BASE COCONEEL』の店先に置かれたレンタル原付バイク。鮮やかな夏みかん色が店のアイキャッチになっている。秋吉台の緑にもよく映えることから、フォトジェニックなアイテムとしても人気を呼んでいる

います。お金がないということを逆手に取れば、工夫する楽しみがあるともいえるのではないでしょうか。ないことを悲観的にとらえるのではなく、前向きに取り組むことが大切だと思います。

別府弁天池の湧き水でいれるこだわりの「もこもこカフェオレ（左）」と「ドリップコーヒー（右）」。生地から作る自家製タコスやタコライスなどの軽食も人気。海外のビールや地元のクラフトビールなどのアルコール類も充実している

――松田さん、オープン前に考えていたこととよい意味で違ったことはありましたか？

松田　宿泊業よりも飲食業の売上の比率が遥かに高く、地元のリピーターが多いことに驚きました。コーヒーを片手に寛がれる人、打ち合わせの場として利用される人、採れたての野菜や山菜を持ってきてくださる人…、本当にいろいろな人々に支えられているなと感じ、僕1人の店ではないという思いが日に日に強くなっています。ここに来れば誰かと仲良くなれる。そんなアットホームな空間を、みなさんと一緒に作りあげていきたいと思います。

地域同士がつながることで可能性はさらに広がる

――梅原さんは最近どのような商品に携わっていらっしゃいますか？

梅原　四万十川流域で栽培されている紅茶と、ユズの名産地として有名な馬路村のベルガモットとを組み合わせて、『あうんアールグレイ』という紅茶を開発しています。パッケージデザインが仕上がり、商品がもうすぐ店頭に並ぶ予定です。このように、1つの地域だけでなく、複数の地域のよさを組み合わせることで、さらに新しいことができる可能性が広がっていきます。

服部　梅原さんがされていることは、地域に眠っている魅力を掘り起こす“耕すデザイン”といえばよいでしょうか。四万十に限らず、近年、地方の小さなエリアがよりクローズアップされてきている感じがします。美祢市も同じように、埋もれている小さな魅力を組み合わせて、いかに価値化していけるかが、これから大切になってくるのではないでしょうか。お2人が一緒に活動をしたら、何か楽しいことが生まれそうでわくわくします。

――つながりが広がることで、さらに面白い商品やサービスが生まれていきそうですね。

松田　ここにさまざまな人が集まることで、情報が集まり、その情報を求めて人が集まる。さらに、ここで出会ったゲスト同士が意気投合して、「一緒に何かやろう」とその後の活動に発展していくかもしれません。ゲストハウスが地域のハブとして貢献できる可能性を感じています。

「ないものはない」足るを知る暮らし方

――どこの地方都市にも、さまざまな課題があると思います。今だからこそクリエイティブの力でできることはあるでしょうか？

梅原　ヒントとして、島根県の沖合にある隠岐諸島の中ノ島にある海士町の事例を紹介したいと思います。もともとこの島には「LOVE ISLAND AMA」というキャッチフレーズがありました。「私たちは愛の島です。だから本土から観光に来てください」とうたっていました。これを見たときに、海士町の人たちは島の価値に気づいていない、都会の真似をしても、その土地本来のよさは伝わらないと感じました。海士町には、コンビニも、デパートも、映画館もありません。都会のように便利なものは一切ない。だからこそ、自然の豊かさや人とのつながりを感じることができる。そうした考えから、笑いとデザイン的な思考で生み出したのが、「ないものはない」というキャッチフレーズです。この言葉には、「どうあがいても田舎の離島。流行のものや娯楽は何もない。なくてよい」という意味と、「ないものなんて何もない。大事なことは全てここにある」という2つの意味が込められています。一見、矛盾しているようにも聞こえますが、「ないものはない」と認めることで、「ないのなら、みんなでつくればいい」という発想が生まれます。映画館がないなら、自主上映会を企画すればいい。おしゃれな家具がないなら、DIYすればいい。「ないものはない」からこそ、何とかして楽しもうと知恵を出し合うことで、周囲とのつながりが深まり、地域に活気をもたらします。

現在、「ないものはない」をベースにさまざまな取り組みがおこなわれており、「この島で暮らしたい」という若者も増えているそうです。

また、今後の展開として『グローバルないものはない学会』を開催しようとしています。今ある資源を活用して、豊かな暮らしにつなげていくことの大切さを、学会を通じて世界中の人々に伝えていきたいと思っています。

梅原 真さんが手掛けた島根県隠岐郡海士町のキャッチフレーズ「ないものはない」。その土地の個性を強みにするデザイン的な思考で、地域に活力を生み出している

――まさに逆転の発想ですね。これは海士町だけの話ではなく、全国各地方のアイデンティティーの話ともいえそうです。

梅原　日本全国どこに行っても同じようなものが手に入れられるようになった結果、1次産業が衰退し、その土地ならではの風景が急速に失われているように感じます。だから、仕事に取り組むときには、「そこにあるものでやる」というスタンスを最も大切にしています。みなさん「うちの地域には何もない」と嘆かれますが、決してそんなことはありません。自分たちの足元をしっかり見つめ直して、それぞれの個性にあったコミュニケーションの方法を見つければ、今までマイナスだと思っていたことをプラスに変える発想が生まれてくるはずです。いま地方に必要なのは、都会の真似ではなく、自分自身の考えだと思います。

人を楽しませるためにまずは自分たち自身が楽しむ

――松田さんは先ほどの「ないものはない」についてどう感じましたか？

松田　一見すると自虐のようにも聞こえますが、「ないものはない」と宣言することによって、その土地の人々が自分たちの暮らしを心の底から楽しんでいる様子がものすごく伝わってきました。訪れた人が彼らの姿を見て「いいな」と感じれば、自ずと移住者も増えていくのではないでしょうか。外から来た人を楽しませるためには、自分たちの町を誇りに思い、自分たち自身が楽しむことが何よりも大切だと感じました。

――松田さんは日々の暮らしのなかで何か楽しんでいることはありますか？

松田　最近は、宿泊された方と夜な夜なセッションを楽しむのがマイブームになっています。僕が即興でギターを弾き、お客さんにはボーカルやカホンという打楽器で参加してもらっています。音楽を楽しむことで気持ちがほぐれて、お客さん同士の距離がグッと縮まり、一体感が生まれたり、会話が弾んだりと、みんなで楽しい時間を共有しています。

先日は、インターネットライブ配信にもチャレンジしてみました。画面を通じて、1人でも多くの人に、楽しそうな雰囲気が届いていたらいいなと思います。そして、新型コロナが落ち着いたときに、この映像のことを思い出して、「美祢市に行ってみよう！」と思ってもらえたらうれしいですね。

――かつて賑わっていた日本各地の観光地が、集客に悩んでいるという悲しい現実があります。それに対して何かアドバイスがありますか？

梅原　実は香美市にも、日本三大鍾乳洞の1つに数えられる「龍河洞」という洞窟があります。最盛期には年間105万人の観光客が訪れていたのですが、いまは10万人くらいにまで落ち込んでいます。こうした現状を変えていくためにも、松田さんのような新しい感性をもつキーパーソンが、さらに重要な役割を果たすようになっていくと思います。

服部　2015年に美祢市は、Mine秋吉台ジオパークに認定されました。観光名所をジオパーク、洞窟探検をジオツアーと呼び方を変えるだけで、いままでとは全く違うものに生まれ変わりました。このように、やり方次第では、眠っていた資源を再び輝かせることができると思います。そして、先ほど梅原さんや松田さんがお話されたように、個人の価値観に触れる瞬間が地域にたくさん存在すれば、もっと楽しい日常を過ごせるのではないでしょうか。

12年間インディーズバンドのギタリストとして東京で活動していた松田さん。店を訪れる人たちと一緒にセッションを楽しむのが最近のマイブーム

YUMEHAKU-CAFE vol.3 Mine

松田　今日のお話を聞いて、資源がないと嘆くのではなくて、ものの見方や感じ方次第では、可能性はいくらでも広げられることがわかりました。これからも美祢のよさを1人でも多くの人に伝えていきたいと思います。

――最後に、松田さんの今後の展望や思いを教えていただけますか？

松田　ここ数年、美祢市内にもパン屋やカフェ、雑貨屋など、魅力的なお店が増えています。この流れがさらに加速して、美祢市全体が盛りあがっていくことを期待しています。

自身の目標としては、秋芳洞商店街に2店舗目を作ることを計画しています。しばらく秋吉台や秋芳洞を訪れていない方もいらっしゃると思うので、ここにかっこいいお店を作ることで、再び足を運ぶきっかけになれたらうれしいです。また、地元の人にもたくさん利用していただき、地域の交流を深める場所になれたらいいなと思っています。

――地域の楽しみ方を見つけるためのヒントとなる貴重なお話を聞くことができました。本日はパネリストのみなさん、ありがとうございました！

今回もオンライン開催となった『ゆめはくカフェ』には、地域を元気にする立役者4人が参加。土地の個性を引き出す発想の転換、コミュニケーションを楽しくするデザインなど、さまざまなアイデアが飛び交った

◎秋吉台ゲストハウス TRIP BASE COCONEEL
〒754-0511 山口県美祢市秋芳町秋吉2943-1
アクセス：秋芳洞バスセンターから徒歩5分
https://www.coconeel.jp/

進行役

山出淳也　Yamaide Junya

1970年生まれ。NPO法人BEPPU PROJECT代表理事、アーティスト。文化庁在外研修員としてパリに滞在（2002～04年）。アーティストとして国際的に活躍した後、2005年にBEPPU PROJECTを立ち上げ現在に至る。混浴温泉世界実行委員会 総合プロデューサー（2009年～）、第33回国民文化祭・おおいた 市町村事業 アドバイザー、文化庁審議会 文化政策部会 委員（第14期～16期）、グッドデザイン賞 審査委員（2019年～）、山口ゆめ回廊博覧会コンダクター（2019年～）・平成20年度 芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞（芸術振興部門）。

聞き手

服部滋樹　Hattori Shigeki

1970年生まれ、大阪府出身。京都芸術大学芸術学部教授、クリエイティブユニットgraf代表、クリエイティブディレクター、デザイナー。建築、インテリア、プロダクトに関わるデザインや、ブランディングディレクションなどを手がける。デザインリサーチからコンセプトを抽出し、地域や社会基盤もその領域として捉え、仕組みの再構成と豊かな関係性を生み出すコミュニケーションをものづくりからデザインする。プロジェクトからプログラムへ、ムーブメントからカルチャーへ育むデザインを目指している。

わたしのオススメ

松田寛之
（秋吉台ゲストハウス
TRIP BASE COCONEEL）

グルメ

お食事処 山村　からあげ

お食事処 山村
美祢市美東町真名2256　Tel. 08396-5-0413
[営業時間]11:00～14:30、17:00～20:15
[定休日]火曜日

小学生の頃からかれこれ30年以上慣れ親しんできた大好きな味です。美祢市民のソウルフードといっても過言ではないくらい、地元の人なら1度は食べたことがあるはず。うちのゲストハウスでパーティーを開くときにも、よくオードブルとして注文しています。そのまま食べてもおいしいのですが、特製ダレとからしを付けて味わうのが山村流。この組み合わせは、一度食べたらヤミツキになること間違いなしです！

お土産

琥珀糖 水ノ雫

今年3月に新たに仲間入りした美祢市の土産品。美祢魅力発掘隊員がプロデュースして、製造やネーミング、ロゴデザインまで、地域住民が一体となって作りあげました。味はプレーン・レモン・イチゴの3種類。それぞれ別府弁天池・秋吉台の石灰岩・秋吉台の山焼きをイメージしています。美しい見た目に加えて、外はシャリ、中はプルンとした新食感が楽しいお菓子です。

あまいろcafe
美祢市秋芳町秋吉3484-1　Tel. 0837-55-4005
[営業時間]10:30～16:00
[定休日]不定休
※9月30日(木)までは数量限定販売

スポット

白水の池

秋芳洞から別府弁天池に向かう途中にある、知る人ぞ知る穴場スポット。日によって、池の水の色がさまざまに変化する様子はとても幻想的です。池の真ん中にある小島には祠が鎮座し、ひときわ神秘的な空気に包まれています。小島までは簡易な橋でつながっているだけなので、渡るのはちょっぴりスリリング。勇気のある人はぜひチャレンジしてみてください！

美祢市観光協会
美祢市秋芳町秋吉3506-2　Tel. 0837-62-0115

ゆめはくカフェのご案内

ゆめはくカフェ YUMEHAKU・CAFE

配布中！ kakeru vol.1

1 山口市

「芸術文化のコミュニティ・派生するサロン」

2021年5月15日(土)　会場：阿東文庫(オンライン配信)

室町時代の大内文化を受け継ぎ、今も芸術・文化が盛んな山口市。市内に数多くある芸術・文化に関連した施設やコミュニティの活動を知り、それぞれの役割や関係性、今後の連携について考える。

藤 浩志
（美術家・秋田市文化創造館館長）
×
明日香 健輔 ・ 渡邉朋也
（阿東文庫）　（YCAM）

配布中！ kakeru vol.2

2 山陽小野田市

「産業と暮らしの嗜み方」

2021年5月23日(日)　会場：きららガラス未来館(オンライン配信)

日本の夕陽百選にも選ばれた焼野海岸や見事な地層や岩場が見られる本山岬公園、九州・四国までも望める竜王山公園など、美しい景観に恵まれた山陽小野田市。この地に移住し活動を続けるガラス造形作家と気鋭の建築家が、地域の産業とそこに暮らす魅力を語らう。

藤原徹平
（建築家）
×
池本美和
（ガラス造形作家）

配布中！ kakeru vol.3

3 美祢市

「楽しみを発掘する」

2021年6月12日(土)
会場：秋吉台ゲストハウス TRIP BASE COCONEEL(オンライン配信)

広大なカルスト大地や鍾乳洞などを資源とした観光が盛んな美祢市。「誰もが3億年の旅をしたくなる」をコンセプトに、原付バイクの貸し出し、ケイビングツアーといったアクティビティを提供するゲストハウス＆カフェバブTRIP BASE COCONEELを事例に、地域の楽しみ方の発掘・創出について語り合う。

梅原 真
（デザイナー）
×
松田寛之
（秋吉台ゲストハウス
TRIP BASE COCONEEL）

掲載誌 kakeru vol.4

4 萩市

「旅と交流」

2021年6月19日(土)　会場：萩ゲストハウス ruco(オンライン配信)

江戸時代の地図がそのまま使える城下町・萩市のゲストハウス ruco。宿泊客にはリピーターも多く、萩が気に入って移住してくる人もいるというrucoの事例から、人との交流や旅をすることで生まれるものについて話す。

松浦 弥太郎
（エッセイスト・クリエイティブディレクター）
×
塩満直弘
（萩ゲストハウス ruco）

掲載誌 kakeru vol.5

5 防府市

「発酵・日々たべること」

2021年6月26日(土)　会場：お茶室 芳松庵(防府天満宮内)

毎日の食卓に欠かせない醤油や味噌などの醸造業が盛んな防府市。家で過ごす時間が増え、日常の何気ないことがかけがえのないことになった今、食にまつわるあれこれをテーマにトークする。

高山なおみ
（料理家・文筆家）
×
光浦 健太郎
（光浦醸造）

掲載誌 kakeru vol.6

6 津和野町

「医食同源」

2021年7月10日(土)　会場：糧(医食の学び舎 旧畑迫病院内)

会場は、津和野町の国指定名勝旧堀氏庭園の一部として文化財指定された、旧畑迫病院で運営される医食同源をコンセプトとした場。津和野の暮らしや医食同源を体現して見えてきたもの、これから目指すものをテーマに語る。

稲葉俊郎
（医師・医学博士）
×
大江健太
（糧）

掲載誌 kakeru vol.7

7 宇部市

「伝統から紐づく暮らし」

2021年7月18日(日)　会場：igual coffee(永山本家酒造場2F)

自然と産業がバランスよく混在する宇部市。そこで明治から続く永山本家酒造場が大切にしてきたものや地域との関わりを知るとともに、遺したい伝統や景観、受け継がれていく産業と生活、そこに住む人たちの幸せについて考える。

田中元子
（株式会社グランドレベル代表取締役社長・
喫茶ランドリーオーナー）
×
永山貴博
（永山本家酒造場）

次号予告

kakeru vol.4は2021年9月1日の発行です。
「旅と交流」　松浦 弥太郎(エッセイスト・クリエイティブディレクター) × 塩満直弘(萩ゲストハウス ruco)

ゆめはくカフェ通信『kakeru』は公式Webサイトからダウンロード可能です ▶ https://yumehaku.jp

山口ゆめ回廊博覧会　PICK EVENTS

美祢市
Mine

ゆめはくでは地域の特徴をいかしたイベントがもりだくさん！
特別な場所で体験するアートと食の夢のコラボレーションや、
普段は見ることができない場所を案内するスペシャルなまち歩きなど、
ゆめはくで「いま・ここ」でしか体験できないイベントをお楽しみください。

あなたの未体験エリアに案内します！

秋吉台の地下で未踏の大洞窟探検ツアー

7月1日(木)―12月31日(金)　秋芳町地区
※2週間前までに要予約。それ以降、要問い合わせ。
大人17,540円／小学生14,520円(いずれも消費税、傷害保険料含む)

「アソビュー半額対象プログラム」※キャンセル料あり
https://www.asoview.com/note/2664/

秋吉台の未公開洞窟で洞窟探検。
変化に富んだ洞内には、美しい鍾乳石や地底湖など見どころ満載。
日常生活では絶対に体験できない地下の世界を
ヘッドライトの明かりのみで進んでいきます。
国内外で洞窟調査・探険実績豊富なガイドがご案内。

［お問い合わせ］秋吉台アドベンチャーツアーズ　Tel. 080-4555-4264

秋吉台でアウトドア体験！

里山フェス in 秋吉台

10月24日(日)　秋吉台家族旅行村

秋吉台でアウトドア体験！ 木製遊具や木工体験、アウトドアクッキングなど盛りだくさん！
美祢市の旬の食材も食べつくそう！ 新鮮な美祢市の特産品も販売しています。

ランタンのもとに台湾と美祢の魅力が集う夜

美祢ランタンナイトフェスティバル

11月頃　美祢市役所周辺

台湾を代表する祭り「台湾ランタンフェスティバル」で使用される
大小さまざまなランタンが、美祢の街を鮮やかに彩ります。

その他のイベントはこちら

公式 Web サイト
https://yumehaku.jp

［新型コロナウイルス感染予防対策実施について］各種イベントは新型コロナウイルス感染症への対策を十分に施したうえで実施します。
また、状況に応じて随時イベントの開催可否・内容変更を検討し、変更した内容は公式 Web サイトでご案内いたします。

kakeru
ゆめはくカフェ通信

カケル　vol.3　Mine　　2021年8月12日発行

発行元: 山口ゆめ回廊博覧会実行委員会事務局(山口市交流創造部山口ゆめ回廊博覧会推進室内)
〒753-8650 山口市亀山町2-1 Tel. 083-934-4152
企画: 特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT　制作: 株式会社 野村デザイン制作室
編集: 廣石正樹(be:spoke)　アートディレクション＆デザイン: 野村勝久　ライター: 小野理枝
撮影: 江本 悟(SARUTO Inc.)　コピーライター: 大賀郁子　デザイン: 岡田一星
イラストレーション: 山内庸資　印刷: 大村印刷株式会社